

神永正博『不透明な時代を見抜く「統計思考力」』

ディスカヴァー・トゥエンティワン（2009年）

本書は数学が苦手な文系の人のために書かれた、数式を使わない統計学の解説書である。以前からこうした書籍はくりかえし作り続けられている。本書のメリットは内容がわかりやすいこと、そして、最新の本であることだといえる。読み手にとっては、苦手なことを学ぶ際に、今日的テーマと新しいデータを題材としている方が興味をつなぐことができるので、理解が進むと考えられるからである。

基礎編では「データをみる」と題して、「生データに当たることが必要」という統計をみる原点が強調される。一部の都合のよいデータだけを引用して分析された論文でないかどうかの検証が大切なことはいうまでもない。その例として、本書の副題にもなっている「小泉改革は格差を拡大したのか」という命題をいくつかのデータによって検証している。ただし、これはオリジナルではなく、著者も引用しているように、大竹文雄氏による「ジニ係数の拡大が高齢化によるものだ」という分析とそれをきっかけに行われた論争で取り上げられたいくつかの指標を提示したものである。著者は分析結果を「小泉改革と格差拡大との関係は明確でないが、格差社会は幻想ではない」とまとめている。データをみると、小泉改革以前からではあるが、非正規労働者が増加してきたことや高齢者が増えたことで貧困層が絶対的に増加したことは読み取れる。

中級編は「データを読む」と題して、平均と分散、正規分布と「べき分布」、相関という3つの統計用語に限って解説している。平均だけでもものをみるのではなく、分散をみることの重要性が語られる。さらに、平均や分散が正規分布を仮定しているのに対し、所得や株価などでは平均や分散が定まらない「べき分布」が存在すること、それを正規分布と類似のものとして扱うことは大きな誤りであることを、投資銀行の破綻を例にして紹介している。この「べき分布」の解説に紙数をさいている点は目新しい。また、新しい指摘ではないが、因果関係と相関関係は異なること、一般にいわれる相関は直線的な相関であり、相関係数が0でも無関係とはいえない場合があることなどが解説されている。

上級編は「データを利用する」と題して、人口推計を取り上げ、「人口ボーナス」「人口オーナス」という概念を紹介し、その観点からインドと中国の経済成長の今後を予測している。しかし、紙数も限られているためか、基礎編や中級編に比べると手薄である。

読みやすい本なので、一読すると、データを多面的にみる必要性、データを前にして自力で考えることの重要性を理解することができる。また、よく読むと、著者が取り上げたデータも、その背景や根拠を詳しくみないで、うのみにはできない、と思われる点が少なからずあり、それを含めて「自分はわかっている」と過信しない『統計思考力』を高める一助になると思われる。

（滝口 哲史）